

フィリピン国 ダバオ市市場視察報告

日程：2017年11月6日～12日

フィリピン国ダバオ市は、フィリピンで二番目に大きなミンダナオ島の南の端にある都市で、首都マニラ、世界的に有名な観光地であるセブに次ぐフィリピンで第三の都市である。

人口145万人、現在のフィリピン国大統領デュテルテ氏の出身地である。デュテルテ氏はダバオ市長を経験後、現職の大統領に就任した。

以前は、ダバオ市は非常に危険な街であったが、デュテルテ氏の市長時代に徹底的に治安維持を行った結果、現在では夜でも歩いても犯罪に巻き込まれないような比較的安全な街となっている。（もちろん、日本とは違うため一人で出歩くことは危険が伴うと思われる。）

ダバオ市のメイン道路は片道2車線である。アメリカと同じ右側通行である。信号はほとんどなく、交差点でさえも信号なしである（感覚的だが、3kmに1箇所程度）。そのため、左折する際にはほぼ無理やり割って入って行くのだが、暗黙のルールは守られており、譲ったり譲られたりの繰り返りで、滞在期間中、追突事故を見ることはなかった。

しかし、日本人が運転することは無理だと感じた。

日本のようなバスはなく、ジブニーと呼ばれる軽自動車を改良したバスや、トライサイクルといったサイ

ドカーが庶民の足として動いている。

これらが、客がいると無作為に停車するため、道路は昼夜を問わず渋滞状態である。そのため、ダバオ（フィリピンには）、時間の遅れを許容するダバオタイムが存在し、だいたい15分程度約束の時間より遅れてしまう。

安全になったとはいえフィリピンでは銃が回っており、空港、港湾のゲートでは警官がショットガンのような大型銃を携帯していた。

市内のショッピングモール入り口でも、金属探知機を設置し、4～5人のガードマンが銃を携帯して手荷物検査を行っていた。



市内を走るジブニー



水源にいたガードマン（銃携帯）

バイオログフィルターの制作工場見学

バイオログフィルターの制作工場は、ダバオ市内から約1時間離れた場所にあり、周辺は畑、いくつかの工場がある。工場には約40人の従業員が働いている。以前は100人を超えていたそうだが、需要の低下と効率化を図るため人員を整理しているところである。



バイオログフィルター工場 全景



現地ビジネスパートナーリックキー氏

バイオログフィルター施工箇所見学

最も新しいバイオログフィルター施工箇所は、市内から車で片道4時間以上離れたところにあり、イスラム過激派組織 Isis の影響範囲内に入っているため、危険と判断し見学することはできなかった。



また、現場途中では、大雨による土砂崩れの復旧工事現場を通った。施工は中国の企業が行っていた。バイオログフィルターに似たネットで法面保護を行っていたが、自然素材のものではなく、人工物であった。施工も雑で、いかにも直ぐ壊れるような、再び土砂崩れが起こりそうな施工であった。



ダバオ水道局視察

ダバオ市の水道は1973年にアメリカ資本により整備された。

以前は緩速ろ過方式であったが、良好な地下水が豊富にとれることから、現在では約20の井戸から地下水をくみ上げ、塩素処理のみで供給している。

今回訪れた水道施設は、水源からの原水を塩素消毒し、配水池まで送る送水施設であった。

月量で9,200,000m³/月（日量306,666m³/日）の水量を扱っている。

一部、山の地域には戦前日本が作った堰があり、そこから取水した水を緩速ろ過処理後、供給している箇所もある。

蛇口から直接水を飲むこともできるほど水質は良好であるが、ダバオ市民の中には「水道水は塩素臭い」といって飲まない人もいる。また、水道水を飲んでしているとガンになると思い込んでいる。

ダバオは地下90～130mに水脈があるようで、市内の井戸はその深度で取水している。

塩素は液塩素を使用している。

市内では一部の給水管が老朽化し、漏水が起きているようである。ダバオ市は近年、人口が急増しており、給水区域の拡張に伴う水道管の整備が行われているとのことである。

水道管は、小口径はハイポリが使われているようだが、大口径は鋼管で、曲管部分は現地で溶接して作成していた。



ダバオ市水道局 Noel氏（右二人目）



日本が作った堰



ダバオ市内水道管





水道施設はきれいに掃除されており、管理が行き届いている印象を受けた。正直、地下水がこんなに豊富で清浄とは思ってもよらなかった。

管の老朽化に伴う更新需要、給水区域の増大、水源開発などの問題解決を図るような提案をしていければと考えている。